

2018年8月27日

2018年度 第29回中唐文学会大会のお知らせ（第2号）

残暑厳しき折、会員の皆様にはお元気でお過ごしでしょうか。
第29回中唐文学会大会は、10月5日（金）の14時より、早稲田大学にて、以下の要領で開催いたします。
ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

会 場：早稲田大学 小野記念講堂

東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学27号館 地下2階（次頁地図をご参照ください）

日 程：10月5日（金） 14時開始

~~~~~  
13時30分～

**受付開始**

※参加費として1,000円を申し受けます。

13時50分～

**開会の挨拶**

### ・A、研究発表の部（14:00～16:00）

14時00分～15時00分 **第一発表**

題 目：黄巢の乱と唐末・杜荀鶴の詩について  
発表者：鳴海 雅哉（函館工業高等専門学校）

15時00分～16時00分 **第二発表**

題 目：杜甫の鷹、鶻のイメージ  
発表者：谷口 真由実（長野県立大学）

### ・B、シンポジウムの部（16:00～17:00）

16時00分～17時00分 **シンポジウム：目加田誠先生——その人と文学**

パネリスト： 田口 暢穂（鶴見大学文学部名誉教授）  
中村 民雄（早稲田大学法学部教授）  
コーディネーター：高芝 麻子（横浜国立大学教育学部）

17時00分～17時30分 **総会**

18時00分～20時30分 **懇親会** 於「森の風」（早稲田大学26号館15F、次頁地図をご参照ください）

※懇親会費は3,000円を予定しております。



**大会会場**  
**早稲田大学小野記念講堂**  
**東京都新宿区西早稲田 1-6-1**  
**早稲田大学 27号館 地下2階**

**懇親会会場**  
**「森の風」**  
**東京都新宿区早稲田鶴巻**  
**516 早稲田大学 26号館**  
**大隈タワー15F**  
**※大会会場隣の建物です**

早稲田大学へのアクセス

- J R 山手線/西武新宿線 高田馬場駅から徒歩20分
- 東京メトロ 東西線 早稲田駅から徒歩5分
- 東京メトロ 副都心線 西早稲田駅から徒歩17分
- 都バス 学02 (学バス) 高田馬場駅 - 早大正門
- 東京さくらトラム (都電 荒川線) 早稲田駅から徒歩5分

## お願いとお知らせ

※学会出張の手続き上必要書類がございましたら、幹事土谷 (aktsuchiya@waseda.jp) までお知らせ下さい。  
 ※本会は、会費の納付で会員資格継続の作業を進めます。  
 同封した振込用紙に金額をご記入の上、お振り込み下さいますようお願いいたします。

**【振込先】 口座番号00100-8-631654 口座名称 中唐文学会**  
**正会員3,000 円、準会員 (会報不要の方) 1,000 円**

準備の都合上、会費振込 (あわせて大会・懇親会の出欠確認) は  
**9月21日 (金) まで**にお願い致します。

### 各問い合わせ先

|              |                             |
|--------------|-----------------------------|
| 大会関連：        | 土谷彰男 (aktsuchiya@waseda.jp) |
| 幹事(会報)：      | 遠藤星希 (編集長) ・紺野達也 (副編集長)     |
| 幹事(会計・名簿管理)： | 高芝麻子                        |
| 幹事(広報)：      | 紺野達也・石碩                     |
| 幹事(通信)：      | 石碩                          |

## 【A、研究発表の部】

### 「黄巢の乱と唐末・杜荀鶴の詩について」

鳴海雅哉（函館工業高等専門学校）

安史の乱に巻き込まれたことにより、杜甫や李白、王維などが運命を大いに狂わされたことはよく知られている。唐末においても、黄巢の乱（875年頃）によって人生を大きく振り回された詩人は数多い。宮廷人として虐殺の憂き目に遭った者もいれば、その隙をわずかにいかくぐって逃げ延びた者、時勢を憂えながら傍観する者、軍閥に仕えて身を立てた者などである。発表者は、唐末の諸戦乱にその生命を弄ばれた詩人達とその文学に興味を抱いている。

唐末の杜荀鶴（846—904?）、字は彦之も、戦乱に翻弄された詩人の一人である。彼は四十代で進士に登第するまで江南に遊び、その折りに黄巢の乱に遭遇し、集落の惨状を目にしている。その後、進士に登第し、朱全忠（852—912）に仕え、信任されたという。朱全忠は、黄巢軍の武将でありながら唐朝に投降して、その後唐朝を滅ぼして後梁を立てた人物である。

このように戦乱を目の当たりにした杜荀鶴は、その全326首の詩の中でたびたびそれに関わる情景を詠じている。本発表では杜荀鶴の戦乱を詠じた詩に注目し、彼の文学の一面を明らかにしようとする。

### 「杜甫の鷹、鶻のイメージ」

谷口真由実（長野県立大学）

杜甫は詩や賦に五十種弱の鳥を詠じているという。その中で、鷹、隼、鶻、鷂などの鷲鳥（猛禽類）がどのようなイメージで描かれているかに着目して考察するのが今回の発表の主旨である。すでに高木正一氏の「杜甫の馬・鷹の詩について」において、杜甫が「高い理想と激しい気性気魄が（中略）鷲鳥の最たる鷹鶻の神駿な姿や心意気に強くひきつけられ」、鷹に「自負」や「壮心」を託したと指摘されているのをはじめ、先達の優れた研究がある。今回は次の点に着目して探求したい。

一つには、杜甫に先立つ西晋・傅玄「鷹賦」、西晋・孫楚「鷹賦」、隋・魏彦深「鷹賦」、また隋・煬帝「詠鷹」などの表現を杜甫はどのように継承し、さらに新たなイメージを創出、表現したのかを考えること。二つには、杜甫は同じ猛禽類であっても鷹と鶻・隼にそれぞれ異なるイメージを付与している。鷹・鶻・鷂に託されたイメージの差異を明らかにするとともに、「進鶻賦表」が持つ意味を改めて考えることである。

## 【B、シンポジウムの部】

### シンポジウム：目加田誠先生——その人と文学

「言葉は志を成就し、文は言葉を完成する。<sup>かざり</sup>文の無い言葉は遠くまで伝わることはできぬ」

——目加田先生は春秋左氏伝に見える孔子の言を引用し、この一文を「自分のことば」と題しました（全集第8巻）。先生のことばは、詩経や楚辞、唐詩・杜甫といった文学研究の成果を通じて燦然と輝き、いまなお私達の心を揺さぶります。今回のシンポジウムでは、目加田先生と縁の深い方々をパネリストに迎え、目加田先生の学問を振り返りつつ、今後の文学研究のあり方について考えてまいります。

#### パネリスト紹介

##### 田口暢穂（たぐち のぶお）

1946年（昭和21年）生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程ののち、鶴見大学教授を経て、現在は同大名誉教授、公益財団法人斯文会常務理事など。1968年（昭和43年）早大第一文学部に中国文学専修が設立され、主任に目加田誠教授を迎えた際、先生に師事された。著書に、目加田誠訳注『唐詩三百首』のうち作者略伝（平凡社東洋文庫1973-1975）、内田泉之助監修・松浦友久共編『中国の名詩鑑賞6中唐』（明治書院、1976）、簡野道明共著『漢詩の名作集』（明治書院、2011）など。

##### 中村 民雄（なかむら たみお）

1959年（昭和34年）大分県生まれ。東京大学大学院博士課程修了（法学博士）。東京大学社会科学研究所教授を経て、2010年より早稲田大学法学学術院教授。専門はEU法、イギリス憲法、行政法。著書に、『東アジア共同体憲章案—実現可能な未来をひらく論議のために』（昭和堂、2008、共著）、『EUとは何か(第2版)—国家ではない未来の形』（信山社、2016）など。目加田家とは、母方の伯母様が目加田さくを先生（1917-2010、福岡女子大名誉教授）にあたり、目加田誠先生と親交があった。